

インターネット登場以来のインパクト!?

「Chat GPT」で 何が変わるか

わずか2か月で1億人のアクティブユーザーを獲得した話題のチャットボット「Chat GPT」。専門家のなかにはインターネット登場以来のインパクトとみる人も。そこで、Chat GPTの基本と、実務への影響を概観します。

株式会社エル・カミノ・リアル 代表
一般社団法人ITキャリア推進協会アドバイザー

木寺 祥友

チャットGPTの 能力

チャットGPTは、2022年

サンフランシスコのOpenAI社が生み出した、「Chat（チャット）GPT」が話題です。チャットGPTとは一言でいえば、対話形式で、質問に対してまるで人間のように自然に答える技術を備えた「AIチャットボット（人工知能を搭載した自動会話プログラム）」です。OpenAI社のCEOである、サム・アルトマン氏が来日して岸田首相に会うなど、いま一番注目されているテクノロジーです。筆者も先日、岸田派の勉強会でチャットGPTについて講演しました。国会議員の個人秘書業務にチャットGPTを使えないかというところで、積極的な質問が飛び交いました。

もちろん様々な制限や、利用する際のコツ、注意点は多く存在しますが、実務にも十分使えます。官庁や自治体で、試験的に導入するケースも増えています。ついに人類とAIが共存する時代がやってきたのです。

11月30日にサービスが開始され、なんと5日で100万人のユーザーを獲得しました。

そしてわずか2か月で、アクティブユーザー数が1億人に達したのです。TikTokの利用者が1億人に達するのに9か月かかったのと比べても、驚異的なスピードです。ユーザー数は現在も伸び続けています。

一気に普及したので、一過性のブームに終わると考える向きもありますが、実は短期間でユーザーを獲得したサービスほど、息が長く定着するものです。

チャットGPTの登場まで、AIは高度な知識を持つ専門家のものだと思われていました。それを誰にでも簡単に使えるようにしたところが、チャットGPTがこれだけ短期間で普及した要因です。SF映画には、AIと人類が普通に会話し、共存しているシーンがよく登場します。チャットGPTを契機に、それが現実となるでしょう。

ピーター・ドラッカーは、「21世紀にホワイトカラーの生産性向上が起こる」と予言していました。これからはAIによって、ホワイトカラーの生産性は一気に向

チャットGPTに「人工知能が中小企業の経営に及ぼす影響」を質問する

YK 人工知能が中小企業の経営に及ぼす影響を教えてください



人工知能（AI）は、中小企業の経営にも多くの影響を及ぼしています。以下に、いくつかの主要な影響を挙げます。

1. 効率化とコスト削減: AIは、業務プロセスの自動化により、労働力や時間のコストを削減することができます。例えば、AIを使った顧客対応や会計業務、在庫管理などが挙げられます。
2. データ分析と意思決定: AIは、大量のデータを高速で解析し、適切な意思決定をサポートすることができます。これにより、経営者は市場の動向や顧客の嗜好を正確に把握し、適切な戦略を立てることができるようになります。
3. カスタマイズとパーソナライゼーション: AIは、顧客の購買履歴や行動パターンを分析することで、個々の顧客に合わせた商品やサービスを提供することが可能になります。これにより、顧客満足度の向上やリピート率の増加が期待できます。
4. 営業戦略の最適化: AIは、顧客の属性や購買履歴をもとに、営業戦略の最適化をサポートします。これにより、効果的なマーケティングやターゲティングが可能になり、売上の向上が期待できます。
5. 人材開発と教育: AIを用いたトレーニングやスキルアッププログラムにより、従業員の能力開発を効果的に行うことができます。これにより、社内のスキルレベルが向上し、企業全体の競争力が高まります。
6. 新規事業やイノベーションの促進: AIは、新しい市場やビジネスモデルの発見をサポートし、企業のイノベーションを促進します。これにより、中小企業も大手企業と同様のイノベーション力を持つことが可能になります。

上するはずですが、人工知能です、いままでのコンピューターのような、プログラミングされたように動くだけの「定型的な単純作業」だけではなく、専門的知識の習得が必要な作業まで、AI自らが学習し担うことが可能となります。特にチャットGPTは、旧バ

ジョンであるGPT-3・5からことし3月にGPT-4に大幅バージョンアップしたことにより、投げかけた質問に対する回答の精度が大幅に上がりました。最新版であるGPT-4は「米統一司法試験」の合格点を上回っただけでなく、人間の合格者の上位10%に入るスコアを獲得した

のです。3・5が下位10%のスコアにも満たなかったことを考えると、その進化のスピードは脅威としか言いようがありません。

さらにGPT-4は「事実に基づいた回答」をする可能性が3・5に比べて40%高く、許可されないはずのリクエスト（危険な化学物質の合成方法など）に答える可能性は82%低下しています。

短期間にこれだけ進化しているの、今後は人類の考えが及ばないほど賢くなっていくでしょう。人類に対する驚異と捉え、開発を中断するよう求める人もいます。

チャットGPTが与える影響

チャットGPTの実社会への影響を概観してみましょう。

チャットGPTに「人工知能が中小企業の経営に及ぼす影響」を尋ねてみました。その答えが画面1になります。

実際にこれらの業務をすべて円滑にAIが行なえるようになるには、さすがにまだ時間が必要です。しかし、チャットGPTを始めとするAIの進化のスピードを

鑑みると、これらの作業を任せられるようになるのは、そう遠い未来とはいえないでしょう。

OpenAI社とペンシルバニア大学の共同論文によれば、チャットGPTなどの進化により影響を受けそうな職業として、税理士、会計士、秘書、コンピュータープログラマー、データ入力業者などが挙げられています。

これからは、肉体労働は機械（ロボット）、思考はチャットGPTなど（AI）、それらに上手く指示を出す仕事および感情に係わる仕事は人間、という図式が成り立っていきます。チャットGPTなど無料（有料版でも月に20ドル）で文句もいわずに働くので、給与の面でも対抗できる労働力はないでしょう。

日本では、仕事を単価の安い企業へと流れていく、多重下請けの構造になる傾向があります。今後はAIの進化により、アウトソーシングやオフショアといったビジネスは衰退し、安く請け負うことだけがメリットという職業が成り立たなくなるでしょう。AIは特定の業種だけではなく、あらゆる産業に影響を与えるのです。

ホワイトカラーの仕事内容を、

一変させるほどのインパクトがあるのではないでしょう。

チャットGPTの 実務における使い方

企業の実務で必要とされている能力は、クリエイティブなものよりもルールに基づいた定型的な作業です。それはチャットGPTが最も得意とするところです。

時間や手間がかかり人間がやりたがらない、あるいは間違えやすいような「定型作業」はチャットGPTにさせることが、最初のスタートラインでしょう。

チャットGPTの画面には、テキスト入力用スペースがあるので、そこに質問やコマンドを入力すると「回答」として、文書やコードを作成してくれます。チャットGPTが出力できるものは、テキストデータに限られます。

チャットGPTは、指示を出さなければ何もしてくれません。そのアクション＝プロンプト（AIに指示を出す言葉）こそ、人間の役目です。プロンプトは「指示」「内容」「条件」などをわかりやすくすることがコツです。

そして、答えの確実性を検証し

て、修正しなくても回答を得られるようにチャットGPT＝AIを訓練します。利用者の癖を認識することで精度が上がるのです。これは人工知能の特徴といってもよいでしょう。

最初は自分が知らない事項、確認できない件は質問しないことです。うる覚えでもよいので、知っていることに限定したほうがよいでしょう。自分でチェックできないことは、チャットGPTにさせないことです。

実作業のプロセスは、チャットGPTがやってくれるとしても、入口と出口がとても大事なので、効果的なプロンプトを覚えましょう。ある企業では、チャットGPTの用途ごとにプロンプトのテンプレートを用意したそうです。これには効果的なプロンプトが初めから使える、後述する「情報漏洩」の危険性が低減する、といった利点があります。

では、実際にチャットGPTに作業をさせてみましょう。

チャットGPTが得意な作業としては、文章の要約や校正・翻訳・表の作成・メール等の文書作成・プログラミング・市場調査などが挙げられます。**画面2～4**に例示

しました。

その他、想定どおりに作動しないプログラムコードをチャットGPTに入力し、修正方法を質問すると、バグを発見してくれたり、小説など空想モノの執筆も得意としています。

チャットGPT活用時の 留意点

チャットGPTはまだまだ万能とはいえません。利用する際に留意する点がいくつかあります。

・間違える

まずチャットGPTは、間違えた答えを堂々と出力することがあります。ダメ押しで確認すると「申し訳ありませんが、私が以前述べた情報は誤りでした」といつて訂正してきます。

チャットGPTの出す誤った回答を指摘して、悲観的、嘲笑的に捉える人もいます。しかしチャットGPTを使いこなせない人は、人を使うこともできないのではありませんでしょうか。

人を指導し、作業をさせるときと同じように、その人の持っている能力を最大限引き出すよう指示を与え、進捗を確認することが重

要です。チャットGPTを使う際も同じです。つまり、自身の「プロンプト」の能力を上げることが必要なのです。

・情報漏洩

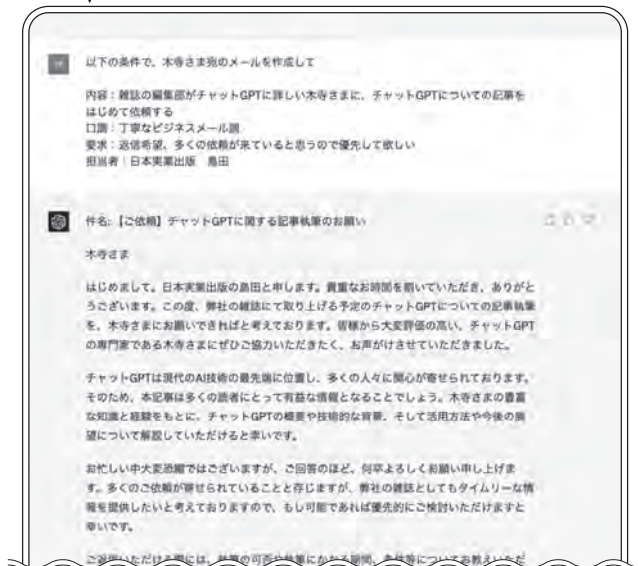
たとえばチャットGPTに、自社商品の製造工程をより効率的にする方法を尋ねたとしましょう。

その際、製造工程の詳細をプロンプトとしてチャットGPTに入力してしまうと、その情報が蓄積され、場合によっては他者の質問に対する回答に流用される危険性があります。

チャットGPTの開発元であるOpenAI社は、入力内容を学習内容に使うことをユーザーに明らかにしています。データを利用されたくない場合のために「アウトバウト措置（第三者への情報提供を本人の希望に応じ停止する措置）」も可能ですが、便利で有能だからといって、自社の経営に関わる情報、顧客や従業員に関する個人情報、機密とされる情報をチャットGPTに入力するのはやめておきましょう。

そのほかにも、チャットGPTの回答が他者の著作であることに気づかず、著作権違反をしてしまう危険性や、子供の思考力が低下

画面 3 メールを作成する



画面 2 調べて表を作成する



画面 4 プログラミングする



するのは、と危惧する声もあることには留意する必要があるでしょう。

現在各企業では、社員のチャットGPT利用を「黙認」している場合が多いですが、今後は危険性の周知などの対策、規程も必要になるでしょう。

今後、人工知能は電力と同じように誰でも利用できるインフラになります。人類にとって、なくてはならない存在になるでしょう。

かつて日本は、1人あたりのGDPが第2位の豊かさを誇っていました。しかし現在では、国のGDP自体は世界第3位にランクインしているものの、1人あたりのGDPは第27位、第33位にランクダウンしています。

チャットGPTの今後

さらに、今後も円安や物価の高騰のため、1人あたりのGDPはさらに下がっていく可能性があります。1人あたりのGDPは国の経済力を測る指標の1つであり、各国がどの程度豊かであるかを示す重要な数値です。

そんな状況下であるからこそ、日本ではチャットGPTをはじめとするAIをいち早く使いこなす、生産性を上げていかなければなりません。

チャットGPTを効果的に使うことで、空いた時間で人間にしかできない仕事、もしくはチャットGPTにさせるべき作業を積み上げ、生産性を上げていくことができます。

最初は簡単で定型的な仕事に利用するくらいだとしても、AIの進化スピードから考えると、すぐに新たな利用法が生まれ、付加価値の高い仕事が行なえるようになるでしょう。企業においても使い方のルールが整い、さらに利用できるシチュエーションは増えていくでしょう。

労働者がチャットGPTを「道具」ではなく「相棒」として、生産性を上げていく時代はすぐそこまできています。

きでら よしと パソコン黎明期よりIT業界へ携わり、日本人としてはじめてJavaをプログラム。携帯Javaの開発にも関わる。ことし4月からチャットGPTエキスパート講座を開講。プロンプト教育に力を入れている。